逆襲する中学生

小愚者

「うわぁぁぁっ、で、出るっ！」
「ふふふ、さっさと諦めて射精させられなさい」
放課後の保健室。
美子（よしこ）先生の手で猛烈にオチンチンをしごかれながら、必死で耐える俺。
女子体操部の練習を見物していただけなのに、この仕打ちはあんまりじゃないか？
確かにうちの中学のレオタードは、胸元が広めに開いていてポロリしやすい。
期待していたのは否定しないけど、今日はラッキーシーンに巡り会えなかった。それなのにどうしてこんな目に。
「出るっ！　れるっ！」
「ったく、包茎のくせにビンビンに勃起させちゃって」
「うひぃぃぃ」
納得しようとしまいと、美子先生の手は動き続ける。
俺は無様に腕を振り回した。
背後から組み付かれ、どう頑張っても逃れることが出来ない。
俺はアキオ。健康な中学二年生男子だ。

そして美子先生は今年の春にやって来た、非常勤の保健講師である。
フルネームは田野原美子。年齢は多分、二十代前半だろう。
非常勤なので、どこかのクラスを受け持っているわけではなく、たいていは保健室にいる。
昭和的な顔立ちの美人で、オッパイがとても大きい。
もちろん裸を見たわけじゃない。でも、ムチムチのナイスボディの持ち主であることは確かだと思う。
中学二年男子なら、女の子の身体に興味を持つのは当たり前。美子先生はそんな男子たちの天敵みたいな存在なのだ。
男子など間違いが起こる前に『抜いて』しまえばいい。
そう公言しているところが実にたちが悪い。
現に俺が射精させられそうになっているように、美子先生は俺たち男子にとって脅威なのである。

「うわぁぁぁっ！」
「ほらほら。射精、射精」
もう駄目だ。
ゴシゴシゴシ。
美子先生はまるで容赦がない。
先走りがピュッと飛んだ。
「出るぅぅぅぅっ！」
「ほらほらぁ」
ゴシゴシゴシ。
オチンチンをしごかれるせいで、タマがつられてリズミカルに踊る。

「うあぁぁぁぁぁっ！」
出る。出てしまう。
快感がズンと突き上げて来てタマが縮んだ。
「わぁぁぁぁ……」
美子先生がフィニッシュとばかりにしごき速度を上げる。
駄目だ。もう駄目だ。
「れるぅぅぅっ」
ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ！
直後、俺は大量の精液をぶちまけた。

「あはは、射精させられちゃったね。ご苦労さん」
「ううっ……」
「ティッシュそこにあるから、始末は自分でしなさい」
満足げに手を洗う美子先生の後ろ姿を恨めしげに眺める。
犯された女の人ってこんな気持ちなんだろうか。
オチンチンを拭いてズボンを引き上げながら、俺は無力感に打ちのめされるのだった。

「アキオ、また美子先生にやられたのかい？　二度目じゃん」
「ち、ちくしょう」

翌日の昼休み、俺は友人の佐々木安男を相手にたそがれていた。
コイツも美子先生に射精させられた経験者なので、心置きなく語り合うことが出来る。
「二回もやられたのってアキオくらいじゃないか」
「背後から関節を極められて逃げられなかったんだ。仕方ないだろ」
「あー、僕のときもそうだったよ」
「安男は何をして捕まったんだっけ？」
「階段下からスカートの中を覗いている所を見つかった」
「そうか。あのスケベ教師、やりたい放題だよなぁ」

正確なところは分からないけど、うちのクラスでも複数の男子が美子先生の毒牙にかかっているはず。
だからと言って、大っぴらに抗議するわけにもいかないのが、こちらとしても歯がゆいところだ。
覗きやスカートまくりなんかの現場を押さえられたケースも多いので、下手に動くとやぶ蛇になってしまう。自業自得の一言で終わりだろう。
それと、強制射精させられたことをクラスの女子に知られるのは格好悪すぎた。

「何？　アキオくん、お仕置きされたの？」
後ろから声が聞こえたので振り返ると、同じクラスの山下秋穂だった。
俺たちの話を聞いていたようだ。
しまった。全然周りを警戒していなかった。

「な、何でもないよ」
山下秋穂とは取り立てて親しいわけではない。
俺はごまかそうとした。
「美子先生にやられたんでしょ。聞こえたもんね」
「……」
下手に取り繕うと墓穴を掘りそうだ。俺はだんまりを決め込んだ。
「ふふ～、そういうのって男子もやっぱり恥ずかしいんだ」
山下秋穂は楽しそうだった。
空気を読んで立ち去るどころか、俺の隣の椅子を引いてどっかりと座り込む。
そう言えばこの子ってエッチ娘だったな。
付き合いはなくても噂くらい耳に入ってくる。
厄介な女子に絡まれたものだ。
「安男君も美子先生にしごかれた経験者だったよね？」
俺が反応しないので、山下秋穂は安男に顔を向けた。
「し、仕方ないでしょ。あの先生、結構力が強いんだ。たぶん格闘技の心得があると思う。組み付かれると逃げられないんだよ」
「あ～、一応抵抗したんだ？」
「ま、まぁ……」
おい安男。何をあっさり認めてるんだよ。
俺は「余計なことを喋るな」と合図したけど、こっちを見ていなかった。

「あの先生、男子なんか抜いて無力化してしまえばチョロいって考えているんだよね」
安男がため息と共に呟く。
「まあ、間違いじゃないよな」
俺は肩をすくめた。
確かに射精後は一時的にではあるが、女の子に対する興味が薄れる。
「男子ってそういうものなの？」
「個人差はあるだろうけどな」
「ふうん。ちょっとうらやましいかも」
山下秋穂は何か思う所があるようだった。
「何でそんな所に反応するんだよ」
「いや、ずっとモヤモヤし続けるより、スッキリ出来た方がいい気がしただけ」
「……」
女子はなかなかスッキリ出来ないという意味か？
良く分からないけど、上手く話が逸れてくれたので良しとする。
ホッとしていると、「で、アキオ君。美子先生に捕まったんだよね？」と話を振り出しに戻されてしまった。山下秋穂も甘くないようだ。
「お、お前には関係ないだろ」
俺は頑なにそっぽを向いた。
当然認める気なんかない。

「だって興味あるじゃん」
「俺が知るかよ」
俺は早く昼休みが終わってくれないものかと時計を見た。
しかしこんな日に限って時間はたっぷりとある。
いったい山下秋穂は、どこから噂を聞いたのだろう。
こいつは俺が最初に美子先生に抜かれた時も、俺の周りをチョロチョロしていた。
直接何か訊かれることはなかったが、ヒヤヒヤしたことを覚えている。
何故バレたのか。
「いいじゃん、教えてよ」
「やだ」

『壁に目あり障子に耳あり』ということわざがある。
保健室は鍵がかかっているわけじゃないから、通りかかった誰かに現場を見られていたなんてケースも否定出来ない。
美子先生本人が誰かに話したのかも知れない。
秘密が漏れる可能性は多岐にわたるのだ。
困ったものだ。俺は頭を抱えた。
でも俺が認めなければ、あくまで噂のままでとどまる。
何としても昼休みが終わるまで、追及をかわさなければ。

「山下さんって、どうしてそんな話知ってるの？　僕が捕まった時だって、アキオ以外に話した覚えはないんだけど。あれからク

ラスの女子が僕を見てクスクス笑っていたから、どうしてバレたのか不思議だったんだ」
安男がタイミング良く俺の知りたいことを訊いてくれた。
「どうしてって、女の子のネットワーク力だよ」
山下秋穂が当然とばかりに言う。
「分かってないみたいね。女子一人に目撃されたらすぐに広まるってこと。そういうもの」
「うへぇ……」
と言うことは、美子先生に抜かれる現場をクラスの女子の誰かに見られたことになるではないか。
俺は絶句した。
「と、当番でも決めて保健室に張り付いてるのか？」
「まさか。正面玄関に向かう時は必ず保健室の前を通るじゃん。うちのクラスだけで女子は21人いるんだからね。誰かの目にはつくよ」
「でもどうやって。ドアは閉まってるんだぞ」
俺はうろたえた声を出した。
「ドアじゃなくて廊下に面した窓。あそこ、カーテンが短くて屈めば中が見えるんだよね」
「……」
「美子先生がああいう事してるのは公然の秘密だし、前を通る時に確認くらいするでしょ。見えたらラッキーって感じで。分かったかな？」
山下秋穂が「くくく」と笑った。
「そういうわけで隠しても無駄だよ、アキオくん。あたし、見ていた子たちから直接訊いたから」
「……」

『たち』って複数かよ！
ショックだ。
俺は口をパクパクさせることしか出来なかった。

「じゃあ、わざわざ本人に確認する必要ないじゃないか。直接訊いたんだろ」
俺は暗に事実を認めた。
ここまで証拠を突きつけられたのでは言い逃れしようがない。
「うん。本題はここからなんだよね」
山下秋穂がニヤリと笑った。
「二人とも、美子先生に仕返ししたいと思わない？」
「そりゃあ……でもなぁ」
俺は安男と顔を見合わせた。
正直、教師相手にそんな事考えもしなかった。
「山下さんも加わって三人でってこと？」
「そだよ」
「でもなんで山下さんが？　何かされたの？」
「……校門前で服装チェックしてるじゃん」
山下秋穂は少しためらってから声をひそめた。
「たまにやってるね」
「あたし、スカート短くしてるから目をつけられやすいんだ」

山下秋穂がそう言ってスカートの裾を引っ張った。
確かに他の女子よりスカートが短い。
女子高生ほどではないが、結構際どいと思う。
「それで？」
「下着が校則違反って指摘されてさ、口答えしたら脱がされたんだよ。その場で」
「……」
女子もそういう目に遭うのか。
俺は驚きを隠せなかった。

「大人しく脱いだのか？」
「まさか。抵抗するに決まってるじゃん。中二にもなって校門前でパンツ脱がされるんだよ」
山下秋穂が顔を赤くしていた。
人並みの羞恥心はあるようだ。
「美子先生に背中から組み付かれてさ、全然動けないの。そのままスカートの中に手を入れられて脱がされちゃった」
「ああ、それ美子先生の得意技だよね」
「そうだな」
俺は安男とうなずき合った。
俺もそうして逃げられないまま、オチンチンをしごかれて射精させられたのだ。
「必死でスカートの裾を押さえたつもりだけど、ジタバタしちゃうじゃん。絶対に周りにいた人たちにお股見られたはず」
「……」

「むかつく」
こいつ、仲間だ。
悔しそうな山下秋穂には悪いけど、俺は親近感を覚えた。

なるほど。美子先生の被害に遭った男子を二人見つけたので、チャンスだと思ったわけだ。
一丁乗ってみるか。
俺だって二回も無様に射精させられたわけだし資格はある。
「美子先生って、中学生なんて好きにしていいと考えていそうだよな」
「実際好きにされてるよね、僕たち」
安男も乗り気のようだ。
「山下さん、作戦は考えてるの？」
「秋穂でいいよ。えっとね、輪姦（まわ）すとさすがに後が怖いから、マン毛全剃りで鬼イカせとか。現場を撮ってやれば女としては手も足も出ないはず」
「ほう……」
想像しただけでオチンチンがムズムズしてきそうだった。
「僕、女の人をイカせたことないんだけど。簡単なの？」
「簡単ではないかな。あたしに任せて。同性の怖さを思い知らせてやるから」
秋穂が自信たっぷりの様子で言い放った。

美子先生襲撃作戦の立案は、全部秋穂が担当した。
本人が任せてと言うので、俺たちは何もする必要がなかったのである。
無防備な状況を作り出すための囮、視界を奪う麻袋、毛剃り用具一式の準備。作戦失敗時の退却ルートに至るまで全て。
秋穂は細かいところまで気が回って有能だった。
もし俺と安男だけだったら、行き当たりばったりで行動して逃げられていたと思う。

そして決行の日。
「ちくしょう、俺が囮役かよ」
「アキオ、頑張ってね」
「出来るだけ保健室の奥のベッドまで逃げて。美子先生をドアに背中を向けた体勢にするのが目的だから忘れないでね」
「わ、分かってるよ」
男二人のどちらかが囮になって美子先生にわざと捕まる。
当然嫌に決まっているから、安男とジャンケンをして俺が負けたというわけだった。
「ぬ、脱がされる前に踏み込んでくれよな」
俺は何度目かの念押しをした。
正直、美子先生にオチンチンをしごかれて、射精せずに耐えきる自信がない。
「あたしたちもタイミングを逃さないようにするから、とにかく美子先生の注意を引きつけて。そこでしくじったら撤退しかないんだからさ」
「責任重大だよ」

「くそう、他人事だと思って……」
最悪、オチンチンをしごかれてバタ狂う姿を秋穂に見られると思うと、俺は心臓バクバクだった。

「もうすぐ美子先生が戻ってくる時間だよ」
「い、いよいよだな」
俺は深呼吸を一つして覚悟を決めた。
作戦の第一段階は、保健室近くの女子トイレから出てきた俺が、美子先生と鉢合わせするところから始まる。
「じゃ、作戦通りに」
秋穂と安男が素早く柱の陰に隠れた。そのまま廊下の監視を開始する。
俺は無人の女子トイレに佇んでポケットの中でスマホを握り、秋穂からの合図を待った。
緊迫のひととき。
やがて、マナーモードに設定したスマホが小刻みに振動した。
おそらく数分と経っていないはずだ。
もう何とでもなれ。
俺は何食わぬ顔で女子トイレを出た。
すると目の前に美子先生が。
「うわっ」
俺は大げさに驚いて逃げようとした。
女子トイレ覗きの現行犯だ。お仕置き必至の案件である。
「こ、こらっ！　待ちなさいっ！」

ガッチリと手首をつかまれ、保健室に連行される俺。
作戦通りとは言え、情けない展開に泣きたくなった。

「そこに座りなさい」
「い、嫌だっ」
手前のベッドを指差す美子先生に抗い、渾身の力で奥に向かう。
「キミ、二回指導した子だよね。まったく懲りないんだから」
「このスケベ教師っ」
アレのどこが指導だ。俺のオチンチンを無理矢理しごきまくって、射精させて楽しんだだけじゃないか。
「キミのような男子は抜いてやるのが手っ取り早いの。それともクセになっちゃった？」
「ば、馬鹿言うなぁっ」
ズルズルと美子先生を引きずるように前進する。
横目で入口ドアを確認すると、閉まった状態だけど鍵はかけられていなかった。
前回と同じだ。
安男たちは……廊下に面した窓の隙間に目が四つ見えたので、たぶんそうだろう。
突入のタイミングを計っているはずだ。
あと数歩。
俺は何とか奥のベッドのフレームをつかむことに成功した。
「逃がすわけないじゃないの」
たちまち背後をとられてベッドに横倒しに転がされる。

「うわぁぁぁ」
カチャカチャとベルトを外される音が聞こえた。
この時点で俺は美子先生の逞しい太腿に胴体を挟まれ、身動きを封じられつつあった。

(まずい。美子先生にドアに背中を向けさせないと)
美子先生の正面にドアがあると言うことは、安男と秋穂が突入出来ないことを意味する。
何としても、ベッド上で１８０度回転しなければ。
「ひぇぇぇ」
俺は早くもズボンの中に入ってきた手にオチンチンを握られながら、ジタバタ暴れた。
脚を振り回して、少しずつ少しずつ身体をずらしていく。
「さっさと諦めたら？」
「イタズラするなぁぁぁっ」
ズボンの中でオチンチンをグリグリ弄られるせいで集中出来ない。
でも何とかしなければ、このまま射精させられて作戦は失敗に終わる。
その現場を秋穂に見られるわけだから、当分の間からかわれ続けることだろう。
「ちくしょうっ」
「ほらほら、オチンチン見せなさい」
美子先生にパンツごとズボンを下ろされた。
俺と違って敵は余裕の表情である。
プルンと露出する俺のオチンチン。

情けないことに、ちょっと弄られただけなのに半勃ち状態だ。
それでもドアが視界ギリギリの位置に見えていた。
もう少しだ。
もう少し頑張れば最悪の結果は避けられる。
「うあぁぁあっ」
オチンチンをグリグリしごかれながら、俺は必死で脚を振り回し続けた。

「うひっ！」
美子先生の指先で包茎の皮をたぐられて剥かれる。
このスケベ教師め。いったい何人の男子をオモチャにしてきたのか、実に手慣れた動きだった。
あっと思った時には亀頭部がズルンと剥けて、西日を浴びてテカっているのだ。
その状態で竿をゴシゴシやられると嫌でもオチンチンが勃ってしまう。
「ふふ、せいぜい抵抗しなさい。無駄だけどね」
親指と人差し指で輪を作るようにして包皮を押さえられた。
こうなると一旦剥かれた皮が自然に戻ることはない。
ヤバい、ヤバい。
俺は射精させられるわけに行かないのだ。
ドアの位置を確認すると、美子先生の斜め後方にあった。
もう行けるんじゃないか。安男、秋穂。頼むから早く来てくれ。
俺は歯を食いしばって脚を振った。

いや、もちろんクラスの女子にオチンチンを生で見られるのは恥ずかしいんだけれども。
ましてビンビンに勃起させられているわけだし。
それでも俺は引き受けた役割を果たして見せたかった。

ゴシゴシ。ゴシゴシ。
「うぁぁぁぁっ」
何の遠慮もなくオチンチンをしごき上げられる。
「さっさと射精させられちゃいなさい」
「い、嫌だっ」
ゴシゴシ。ゴシゴシ。
「しぶといわねぇ」
「くはぁぁぁっ」
カウパーが飛び始めた。
亀頭部が濡れてテカっている。
ゴシゴシ。ゴシゴシ。
早く来てくれっ。もう限界だ。

みんな、ごめん。
俺じゃ駄目だった。
その時。

絶望と悔しさで霞む視界の中に、忍び寄る秋穂の姿が見えた。
隣で麻袋を広げて構えているのは安男だろう。
「ひゃっ!?」
短い悲鳴が上がって、美子先生の手が俺のオチンチンから離れる。
まさに射精寸前。
間一髪のタイミングだった。

ゼイゼイ。
俺はベッドに仰向けに転がった。
鼓動に合わせてオチンチンがヒクヒク動く。
俺の目の前で、美子先生が頭に麻袋を被せられて引き倒されようとしていた。
安男が口を押さえており、くぐもったうなり声が響いた。
太い脚が乱れてスカートの中が丸見えだ。
ゼイゼイ。
俺も手伝わなくちゃ。
起き上がろうとすると秋穂と目が合った。
俺のオチンチンを指差しながら、『にっ』と笑ってサムズアップ。
何だよ、「チンポ見ちゃった」とでも言いたいのか。
恥ずかしくなった俺は、急いでパンツとズボンを引き上げた。

秋穂がベッドの上に剃毛器具やらバイブやらを並べて、美子先生の下半身を狙う位置にビデオカメラを設置する。
そして俺の耳元で「なるべくカメラを遮らないようにして」と囁いた。
準備は完璧なようだ。
安男が上半身担当で秋穂が下半身かな。
俺は暴れる美子先生のウェストに組み付いて押さえつけた。
「もがっ、やめふへほっ」
美子先生が何か叫んでいるが、安男に口を塞がれて言葉になっていない。
たぶん「やめなさいっ」とでも言いたいのだろう。
誰がやめてやるか。
これまでの屈辱、きっちり返させてもらう。
俺は腕に力を込めた。

「ナイス。アキオくん、スカート捲って押さえていて」
美子先生の身体を仰向けに押さえるのに成功すると同時に、秋穂が太腿に馬乗りになって下半身の動きを封じた。
「マンコ出すよ〜」
去年あたりから、うちのクラスの女子は平気で「チンポ」「マンコ」といった単語を口にする。
そういう世の流れなのだろう。
男子の反応を窺って楽しんでいるフシすらある。
「オ、オッケー」
俺は言われるままにスカートの裾を思い切りたくし上げて握りしめた。

パンストに包まれた下半身の眺めは、さすがは大人の女と納得のボリューム感だった。
中学生女子では、こうはならないはず。
「もはっ、んひぃぃぃ」
美子先生は脱がされると察したようだ。
猛烈に抵抗するが、さすがに三人がかりで押さえられては為すすべがなかった。
秋穂がパンストと下着をまとめてつかんで、ズルリと膝の上まで引きずり下ろす。
ガクガク上下する腰をものともせず、力任せだ。
「うぉ……」
俺の目の前数センチに、毛の生えたマンコが露出した。
モヤッとした黒い陰りが狭い範囲に密集して生えていて、俺よりも恥毛が細いように感じられた。
モヤモヤの奥に深そうなミゾが透けて見える。
あまり濃い方ではないのかな。普通くらい？
秋穂が「思ったよりも薄い」と笑っているから、そうなのだと思う。
俺の頭の後ろから首を伸ばして美子先生の恥部を観察しながら、安男が「ほぉぉ」と変な息をついていた。
「そのまま押さえてて。最初に正面を剃っちゃうから」
「分かった」
秋穂がベッドに並べられた器具の中から電気シェーバーを取り上げた。
蜂の羽音に似たモーター音が響く。
秋穂が電気シェーバーを押し当てては、顔を近づけて散らばった恥毛を吹き飛ばした。

それを繰り返す度に、美子先生の恥毛が薄くまばらになっていく。
俺はスカートを押さえたまま、恥毛に隠れていた先生のワレメがクッキリと露わになる様子を眺めていた。
剃り跡が乱れているあたりがエロい。
射精寸前だったオチンチンがムクムクと反応し始める。
「取りあえず、こんなものかな。ワレメの下の方は股を開かせないとね」
電気シェーバーを置いた秋穂がシェービングスプレーを握った。
「小学生みたいにツルンツルンに剃ってやるんだから」
そう宣言して、美子先生のパンストと下着を片脚だけ抜き取る。

どうやって股を開かせたらいいのか。
美子先生の脚は太くて力がありそうだし、モロに蹴飛ばされたらタダでは済まないだろう。
もし秋穂が離脱してしまったら、俺と安男だけでこの豊満な女体を『料理』するのは難しそうだ。
「こじ開けるのか？」
「いや、大丈夫」
秋穂がベッドの上で膝をずって半歩下がった。
暴れる太腿の動きを見て、タイミング良く股の間に身体を割り込ませる。
そのまま前進すれば、労せずして美子先生の股が開くわけだ。
その体勢ならどれだけ太腿が暴れても届かず、蹴飛ばされる心配がない。
上手くやるものだ。俺は感心した。
「な、なんか手慣れてるな」

「そう？　何回かカイボウ現場見てるからね。それで覚えたんだよ」
「あー……」
カイボウとはパンツ脱がしのことだ。
うちの学校でもたまに『誰それが脱がされた』という噂が流れてくる。
俺は残念ながら、まだ女子がやられる現場を見たことはないけど。
「更衣室とかで悪ふざけしているうちに『脱がしちゃえ』ってなることが多いかな。年に何回かはあるよ」
「秋穂も？」
「あるよ。まあ、女の子同士だし」
そうか、秋穂もカイボウされたのか。
「生えてるかとか、オッパイの成長を見たいとか。やっぱ興味あるじゃん」
秋穂が笑いながら、美子先生のバタつく脚を持ち上げて「膝の裏に手を回して押さえて」と言った。
いわゆるまんぐり返しポーズだ。
「こ、こうか？」
「うん。これで脱出不可能なはず」

「丸見えだな……」
俺の視線は、剥き出しになった美子先生のマンコに釘付けになった。
上半分の恥毛はほぼなくなっているのに、下半分がモヤモヤしていて変な感じ。
モヤモヤと言っても密度は低く、陰裂がくっきりと見えていた。
美子先生のマンコの下半分はほぼワレメがぴたりと合わさって閉じていた。ただ、真ん中あたりだけ少し口が開いて、内側に

肉の盛り上がりが覗いていた。
これがクリトリスだよな？
突起だと思っていたが、そうは見えない。
それとも小陰唇か？
俺は正しく見分けることが出来なかった。
秋穂に訊いてしまっていいものだろうか。
いや、それよりオチンチンがギンギンに勃起してヤバい。
美子先生に射精寸前まで追い込まれたダメージが思いのほか大きかった。
背中から聞こえる安男の鼻息が荒い。

「んひぃぃぃっ！　もほへふほっ！」
でかい尻がブルブル暴れ続ける。
スケベ教師も自分がマンコを見られるのは恥ずかしいようだ。
目をそらすのも勿体ないと迷っていると、プシューッと音がして美子先生のマンコが真っ白い泡で覆われた。
秋穂がシェービングクリームを吹き付けたのだ。
丁度良かった。この場でぶちまけずに済む。
俺は心の中で安堵の息をついた。

秋穂が美子先生のマンコに顔を寄せ、陰裂の下から上に向かって剃り上げていく。
シェーバーが移動した部分の白い泡が綺麗に消えて、生々しい肌色が現れる。

場所によっては肌色だけではなくて、小陰唇の一部やその内側の粘膜までもがよく見えた。
秋穂の指先が美子先生の陰裂の内側に潜り込み、押し広げたり、グニグニした小陰唇を脇に寄せて押さえたりしていた。
女の恥毛を剃るには、ワレメを広げて『段差』をなくする必要があるそうだ。
「んひぃぃぃっ！」
美子先生は中学生にマン毛を剃り落とされる屈辱に半狂乱である。
「ふへっ、もへはへっ！」
何を叫んでいるのか聞き取ることは出来なかったが、悔しがっているのは確かだった。
対する秋穂は『してやったり顔』でシェーバーを動かし続ける。
とても楽しそうだ。
（うう、ヤバい。またオチンチンが……）
剃毛完了部分が拡がるに従って、俺のオチンチンがまた騒ぎ始めた。
だって拡げられたマンコの中身が目の前に見えているのだ。
反応するなと言われても無理だと思う。
「アキオ君も安男君も、女のマンコを生で観察するの初めて？」
顔を上げた秋穂がニヤリと笑った。
「あ、ああ。ネットで見たことくらいはあるけどな」
俺は正直に答えた。
「僕もだよ」
「そっかそっか。後で解説してあげるよ」
「……」

オチンチンは持ってくれるだろうか。
俺はそっちの方が不安だった。

「一丁上がり」
数分後、秋穂が剃毛完了を宣言した。
毛根のポツポツも確認出来ないほどに完璧に剃り上げられた美子先生のマンコは、正面から見ると毛が生え始める直前の中学生のように見えた。
尻がでかくて太腿もムッチリと太いのに、縦筋クッキリのツルツルマンコ。
陰裂の深さが十分で、股を閉じた状態ならワレメから具がはみ出すこともなく、とても『美味しそう』だ。
なかなかにムラムラと来る眺めだった。
「似合ってるじゃん」
秋穂がビデオカメラを取り上げて、美子先生のマンコを接写した。
「くひぃぃぃぃっ！　んひぃぃぃっ！」
秋穂の指先でワレメの頭をチョイチョイとくすぐられ、美子先生が猛烈にもがく。
「もへぇぇっ！　ふへはへほっ！」
「何言ってるのか知らないけど、あたしたちを捕まえようなんて思わない方がいいよ。全部撮影してあるからさ。下手な動きをしたら先生のマンコをネットに公開してあげる」
一瞬、美子先生が静かになった。
秋穂の言葉を正しく理解したのだろう。
「先生、毛がない方が似合うんじゃない？　ワレメ女だし」

秋穂に陰裂を下から上にニュルッとなぞり上げられた美子先生がビクンと反応した。
ワレメに刺さった指先が、第一関節と第二関節の中間あたりまで『食べられた』ように見える。
女のワレメってこんなに深さがあるのか。俺は驚いた。
「さ、股開かせるよ。解説してあげるね」
秋穂が先程と同じように身体を脚の間にこじ入れて、美子先生の脚を拡げさせた。
自発的に膝の裏を押さえてまんぐり返しに固定する俺。
俺だって学習するのだ。

「どう？　ご感想は？」
「んひっ！　んひぃぃっ！」
俺の目の前にパックリと開かれた美子先生のマンコ。
秋穂が指をV字にしてワレメを拡げて押さえ、得意気に笑っていた。
「ど、どうって……なぁ」
「ふむぅ……」
「安男、首筋に鼻息かけるなって」
童貞男二人は言葉が見つからない。
生々しいと言うか、卑猥と言うか。
大陰唇の輪の内側にもう一つのお肉の輪があって、上の方に鼻筋みたいな盛り上がりが見える。
盛り上がりの下で頭を出している突起。きっとアレが話に聞くクリトリスだ。どうしてさっきは突起が隠れて見えなかったのだろう。俺は不思議に思った。

「な、なんかグニグニしてる」
「そりゃそうだよ、女だもん」
マンコ鑑賞される美子先生はずっと何か叫んでいたが完全無視だった。

「さて、問題です。穴はどこでしょう」
そのくらいなら俺だって分かる。
うちはペアレントコントロールとかで不健全サイト閲覧を制限されているけど、頑張れば見つけることは不可能じゃない。
「ここだろ」
俺は自信を持ってワレメの下端に見える肉襞を指差した。
「へぇ、ちゃんと分かるんだ。意外」
「俺だって、分かりやすく穴が開いているとは思ってないさ」
「安男君は？」
「な、何となく見当がつくレベルかなぁ」
ブルブルもがく大きな尻を押さえつけながらの女性器講座。
秋穂が指先で美子先生のナマモノを掻き分けながら、「これが小陰唇」「これが尿道口」と微に入り細を穿ち説明してくれる。
「……」
何だかオチンチンが勃起しすぎて痺れてきた。
ズボンの圧力だけで、じんわりと快感が腰全体に拡がっていく感じ。
これはかなりヤバいかも。
俺は別のことを考えて気を逸らそうとしたが、どうしてもマンコから目を離すことが出来なかった。

まずい、射精してしまう。
射精してしまう……。

「次は女の急所についてね」
秋穂が嬉しそうに頭が見えているクリトリスの根元に指を添えた。
「クリトリスって剥けるんだよ。知ってた?」
「い、いや。あまり詳しくは」
「アキオ君のオチンチンと一緒だよ。さっき美子先生に亀頭出されてたじゃん」
「い、言うなぁっ」
やっぱりしっかり見られていた。
これは当分からかわれそうだ。
「クリトリスって個人差が大きいんらしいだよね。小さい人は見分けられないくらいで、大っきい人は指先くらいあるんだって」
「山下さんもはっきり知らないの? 同性なのに?」
安男が訊いた。
確かに言われてみるとそうだ。
「いやいや。女同士だって、他人のクリトリスを観察する機会なんてないって。カイボウの時くらいだよ」
「それもそうかぁ」
なに、女子同士のカイボウってそこまでやるのか。
それはそれで想像をかき立てられる話だ。
「で、剥き方だけど。こうしてサヤを上にたぐって……」

「んひぃぃぃっ！」
クリトリス包皮をめくられる美子先生が猛烈に暴れる。
その勢いに振り落とされそうになった俺は、慌てて体重を乗せて押さえつけなければならなかった。
背後で安男も焦っているようだ。
「あはは。でかクリだね、こりゃ」
それまで見えていた突起は本体のごく一部分だったようで、秋穂の指先に包皮をめくられると、大豆より一回り大きいくらいの楕円形の器官がプリッと露出した。
「くひぃぃぃっ！」
「正面でボケッと見ていると引っかけられるかもしれないから気をつけるんだよ？」
秋穂がそう言った瞬間、尿道口からシュッと短く小水が飛ぶ。
大人の女性でも失禁するんだ。
俺は言葉が出なかった。

「うう……」
ドクンドクン。ズキンズキン。
オチンチンが脈打つ。
カウパーなんかとっくに垂れ流し状態のはずだ。
「クリトリスって動くんだよ」
秋穂が剥けたクリトリスをちょいとつついた。
すると美子先生がけたたましい悲鳴を上げて暴れ、俺の目の前でクリトリス亀頭がヒクヒク動く。

その動きにつられたように、小陰唇も貝の舌みたいに動きながら縮む。
「うぁ……」
その様子を見てしまった俺は……。
もう駄目だ。
腰が熱くなり、タマが収縮した。
「あぁぁぁ……」
そして俺は思いきりパンツの中にぶちまけてしまったのだった。
「うううっ」
恐る恐る目を上げると、秋穂がニンマリと笑って俺を見ている。
俺が射精してしまったことを見抜いている顔だった。
「童貞君には刺激が強かったねぇ。待っててあげるから洗っておいでよ」
「す、すまん」
うう、格好悪い。
俺は押さえ役を安男と交代して、洗面所に走るのだった。

「ちくしょう、濡れたパンツが気持ち悪いな」
替えのパンツなんて用意していないので、俺は洗ったパンツを濡れたまま身につけるしかなかった。
固く絞ったつもりだけど、べったりと肌に張り付いてくる。
このまま終わりならパンツなしで直にズボンを履けばいい。
でも『お仕置き』の本番はこれからだ。

正直、再び射精せずにいられる自信がなかった。
射精直後にもかかわらずオチンチンは半勃ち状態。
あんな場面を目にしてしまったら、またオチンチンが騒ぎ始めるに決まっている。
何とか耐え抜きたいけど果たして……。
まあいいや。ゆっくりしている暇はない。
俺は急いで保健室に戻り、安男と交代した。
「アキオ、ごめん。僕も行ってくるよ」
顔を赤くした安男が、俺と入れ替わりに出て行く。
そうか、安男も駄目だったか。
俺はちょっと安心した。
「あんたたち、ほんと童貞だよね」
「う、うるさいよ」
秋穂が剃毛器具を片付けて、代わりにバイブとローターの動作確認をしていた。
こいつ、中学生なのにどうしてそんなものを持っているんだ。
自分で使っているのかな。
そもそも秋穂って生えているんだろうか。
訊くとやぶ蛇になりそうだから言わないけど、気になるところだった。
「これ女殺しなんだよね。オチンチンの先っぽに当てても効くんじゃないかな」
秋穂がピンク色のローターのスイッチを入れてクスクス笑う。
「試してあげよっか？」

「い、いらない」
下手に言質を取られると本当にやられかねない。秋穂なら。
俺は顔を引き攣らせて首を横に振るのだった。

美子先生は俺が席を外している間に乳房をはだけられていた。
ブラウスのボタンを全部外され、ブラジャーを上にずらされている。
「でかい乳してるでしょ。８８のＥくらいかなぁ」
秋穂が「乳首勃ててやったんだよ」と得意気だった。
たしかに太い乳首がピーンと天井を向いて並んでいる。乳暈も大きいように思えた。
まだ体力が尽きていない美子先生は抵抗を諦めておらず、もがくと乳房がプリンのごとく揺れ動く。
マンコも丸出しのままだし、とても女らしい眺めだった。
「安男君が戻るまで乳揉んで遊んでなよ」
「お、おう」
俺は勧められるままに美子先生の乳房を揉んでみた。
でかくて柔らかい。
面白いように形が変化する。
美子先生は乳房を揉まれても特に激しい反応を示すことはなかった。
調子に乗ってグリグリ捏ねてみる。
面白い。
「揉みごたえあるでしょ」

「ああ。俺の手の平に収まり切らないな」
「乳女だよねー」
「女って大きな胸に憧れるわけ？」
「人によるよ。あたしはもっと大きくなりたいかな」
「ふぅん」
秋穂の胸は……たぶん美子先生の半分もないだろうな。
横目で窺いながら失礼な事を考えていると、「何か言いたいことでもあるわけ？」と睨まれた。
勘のいい女だ。油断がならない。
「ま、オチンチン見せてくれたから、胸くらいサービスしてあげてもいいけどさ」
「なに、マジか」
「そのうちね。考えておくよ」
そのうちってのは、まず来ないんだよな。体のいい断り文句みたいなものだ。
でも秋穂なら、しつこくお願いすれば本当に見せてくれそうな気がした。

やがて安男が戻ってきたのでお仕置き再開だ。
「アキオ、パンツが張り付いて気持ち悪いよ」
「安心しろ、俺もだ」
男二人はいまいち表情がさえない。
美子先生の股間に陣取った秋穂だけが気合が入っていた。
「ふふっ、ローター責めされた女がどうなるか見てて」

秋穂は何のためらいもなく美子先生の膣穴にバイブを突っ込むと、改めてマンコを拡げてクリトリス包皮をめくり上げた。
プリッと剥けたクリ豆は、先程見た状態と変わらないように思えた。
「んひいいいっ！」
乳房を波打たせて美子先生がもがく。
何をされようとしているのか分かっているみたいだ。
「しばらくはすごく暴れるはずだから、ガッチリ押さえといてね」
「わ、分かった」
秋穂がローターのスイッチを入れて、クリトリスの根元あたりに押し当てた。
「くきいいいいいっ！」
「うわわっ」
「なんて力だ」
俺と安男はたちまち弾き飛ばされてベッドに転がることになった。
「だからガッチリ押さえといてって言ったじゃん」
「す、すまん」
「油断してたよ」
改めてバイブを穴に突っ込まれたままの美子先生の股を開かせ、今度は体重を乗せて押さえつける。

何というか、すごかった。
強制的にイカされる女を見るなんて、もちろん初めてだ。
ローターの直撃を受けたクリトリスと小陰唇の上半分が、振動でブルブルぶれて見える。

俺のオチンチンが、射精したばかりだというのにムクムクと頭をもたげ始めた。
美子先生はキィキィ叫ぶし、思い切り押さえていても吹っ飛ばされそうになるし。
まだ大丈夫だけど、こんなのを見ていたらヤバそうだ。
「ふふっ、効いてる効いてる」
秋穂は楽しそうだったが、警戒するように身体を斜めにずらしていた。
「くひぃぃぃっ！　ひぃぃっ！　もはへふほっ！」
「ほれほれ。イッちゃえ～」
「んひぃぃっ！」
そして何の前触れもなく、美子先生の尿道口から小水が噴き上がる。
「おっと、噴いちゃった」
秋穂が間一髪、放物線の直撃を避けた。
なるほど、これを用心していたのか。
シャァァァッ！
失禁音を響かせながら、美子先生のマンコから伸びる放物線がベッドを飛び越え、床に飛び散った。
すごい勢いだ。
俺のオチンチンが一段大きくなる。
たぶん安男も同じだと思う。
「め、めちゃくちゃ効いてるみたいだな」
「コレやられて平気な女はいないと思うよ。あたしだって噴いた……噴くもん」
「ひぃぃぃっ！　あひぃぃぃっ！」

秋穂は失禁中もクリトリスに押し当てたローターを離さなかった。
美子先生のクリトリスは、明らかにさっきよりも膨らんで艶を帯びている。
「絶対にイクから。まあ見てなよ」
秋穂は自信がある様子だった。
女って容赦ないな。
俺はちょっと恐怖を感じた。

秋穂がイカされまいと必死の美子先生の両腿を抱え込み、意地になったようにローター責めを続ける。
何としてもイカせてやるという意志を感じた。
短いスカートがたくし上がって俺の位置からスカートの中が丸見えだが、気にする暇はないようだ。
パンティの真ん中を縦に走るワレメの陰影がかすかに見える。そして膣穴あたりに浮かんだ小さなシミ。
さんざん動いたせいか股当ての奥が横ずれして、はみ出したマン肉が盛り上がっていた。
俺としてはちょっとだけ『取り戻した』気分である。
「安男君、乳首くすぐってやって。効くから」
秋穂が顔を上げて言った。
「え。こうかな」
「それ、乳揉み。乳首の先っぽをくすぐってやるの。そうそう」
膣穴にバイブ、クリトリスにローター、そして乳首くすぐり。
「んひっ！　あひぃぃぃっ！　もへほへはっ！」
美子先生は失禁が止まってもずっとローターを押し当てられたままだ。

時々ピクンと太腿のお肉が痙攣するように震える。
これが効いているって事なんだろうか。
俺は判断がつかなかった。
でも、明らかにうろたえているように思える。

「んっ！　んっ！　ひぃっ！」
数分で美子先生の様子がおかしくなってきた。
童貞の俺にもそれははっきりと感じられた。
麻袋を被せられた頭が忙しく左右に動く。
「ほら、童貞君たち。これ見て」
秋穂がバイブが刺さった美子先生の膣穴を指差した。
接合部が滲み出した白っぽい液体で湿っている。
「女は感じてくると、こうやって汁出すからね」
「き、気持ちよくなってるって事？」
俺の背後から安男が声を上げた。
「そう。当然だよ、クリにローター当てられてるんだもん」
秋穂が「こんなの我慢出来っこないじゃん」とうそぶく。
「どのくらい耐えられるものなのかな」
「人によるよ。教師としてガキ共にイカされてなるものかと必死で頑張ってるんじゃない？」
「……」

俺は美子先生がどんな顔をしているのか、麻袋の下を覗いてみたくなった。
「なあ、袋外したらまずいか」
「うーん、もうちょい待って。こっちの面が割れるとまずいっしょ」
「そりゃそうだ」
「堕ちたら外しても大丈夫だから。そうなった女って何も見えなくなるから」
「へぇ」
しかし俺には判断がつかないので、秋穂の指示を待つしかなさそうだ。
絶対的に経験値が足りていない。俺は痛感した。
秋穂のことを『先生』と呼ぶべきかもしれない。

美子先生の太腿がピクピク動く間隔が短くなってきた。
大きな乳房を揺らしながら抵抗を続けているものの、押さえ係の俺には明らかにパワーが落ちていることが実感出来た。
安男の乳首くすぐりも効いているのかもしれない。
「んひぃぃぃっ！　あふっ！　んへっ！」
悲鳴に喘ぎ声が入り交じる。
「何だか乳首が哺乳瓶の先っぽみたいに大きくなったよ」
安男が面白がっていた。
「その様子じゃ乳噴くかもね。そのままくすぐっといて」
秋穂が「本格的に濡れてきたよ」と、バイブを軽く抜き差しした。
ヌポッ、クチュッ。

湿った音と共に、美子先生の膣穴からお汁が溢れてシーツに垂れ落ちる。
「無理して我慢しなくてもいいんだよ～」
秋穂が小陰唇を片方摘まんでズルンと引き延ばしてからかった。
小陰唇に引っ張られてクリトリスも上を向く。
膨張したクリトリスはもはや剥いて押さえなくても包皮に隠れることがなかった。
「んんんっ！　んんんっ！」
美子先生は悔しがっている様子だ。
たぶん同性にイタズラされていることに気付いているのだろう。

ヤバいな、俺。またオチンチンがビンビンだ。
カウパーが出ている自覚もあった。
こんな現場を見せられたんじゃ、一回射精したくらいじゃ足りない。
でもまた射精したら、秋穂に何を言われるか分かったものじゃないし我慢しなければ。
美子先生がイカされるのが先か、俺が射精するのが先か。
耐えるのは……ちょっと難しそうな気がした。

「んっ！　んっ！　んひぃぃぃっ！」
そうこうしているうちに突然、美子先生の腰がぐっと持ち上がり、大きくエビ反ってからストンと落ちた。
肌が赤みを帯びている。
「あっはっはっ、イカされた、イカされた」

秋穂が手を叩いてはしゃいだ。
「イッた……のか？」
俺は多分そうなのだろうと思いつつも、今ひとつ釈然としなかった。
男みたいに射精するわけじゃないから、はっきりとイッた瞬間が判別出来ないのだ。
「イッたよ。見てよ、このお汁の量」
秋穂が指差す先を見ると、膣穴から大量のお汁が溢れ出ていた。
ローター責めを食らい続けて勃起したクリトリスが、おねだりするようにヒクつく。

「うっ……あうっ」
そして唐突に腰からつき上がる快感。
俺もまた、美子先生とほぼ同じタイミングでぶちまけてしまったのだった。
「ちょっ、あんたまた射精しちゃったのぉ？」
秋穂に笑われた。
「し、仕方ないだろ。こんなの見たことないんだから」
目を逸らして言い訳する。
「さ、第二ラウンド行ってみよっか」
秋穂が俺をからかう暇はないとばかりに、美子先生のマンコを拡げ直してローター責めを再開させた。
「山下さん、まだ続けるの？」と安男の声。
「とーぜん。女は体力の続く限りイキ続けることが出来る生き物なんだよ。知らなかった？」
「し、知らない」

「だからイキ地獄って言われるわけ。さ、押さえて押さえて」
秋穂は洗面所でオチンチンを洗ってこいと言ってくれなかった。
まあ、パンツはびしょ濡れだし、今更洗ったところで無駄と言えば無駄なんだけど。
仕方ないので美子先生の脚を抱えて押さえる。

美子先生は二回目は最初の半分くらいの時間で仰け反った。
三回目はさらにその半分。
四回目からは、イキッぱなしになっているように見えた。
袋の下から「ヒィ、ヒィ」とはしたない喘ぎ声が聞こえてくる。
秋穂は途中からバイブを抜いてしまい、自らの指を美子先生の膣穴に突っ込んで掻き回しつつ、クリトリスにローターを押し当てていた。
額に汗を浮かべて夢中という感じだ。
美子先生の膣穴から上がるクチュクチュと湿った音が大きく響く。
「ほら見て。乳汁」
俺は秋穂に言われて始めて美子先生が乳を噴いていることに気がついた。
噴水のように噴き上がるわけではなくて、白い液体がポタポタと乳首から垂れ落ちる。
美子先生の乳房は下半分が乳汁にまみれてテカって見えた。
ピーンと勃った乳首が乳房の揺れに合わせて右に左に揺れ動く。
「そろそろ袋外しても大丈夫なはずだよ」

「……」
美子先生はどんな顔をしているのだろう。
俺は好奇心に駆られて、そっと袋をめくって中を覗き込んでみた。

最初に見えたのは大きく開いた口。
口周りがヨダレで濡れていて、舌が突き出していた。
さらに袋をめくってみると、寄り目気味に眼球が上がった目が現れる。
目は開いているのに、どこにも焦点が合っていない。
頬のあたりが無理に笑おうとしているかのように、不自然に持ち上がっていた。
俺にはいつもの美子先生の面影はどこにも残っていないように思えた。
女の人ってこんな風になるのか。
「な、なんかすごいな」
「もう理性飛んでるっしょ。ただのメスだよ、メス」
美子先生はもう足を押さえつけなくても暴れないし、自分から股を広げて秋穂に向かってマンコを差し出す始末だ。
確かにメスという表現は正しい気がした。
秋穂がビデオカメラを近づけて、美子先生のアヘ顔を撮影している。
「ふふっ、この顔を見てやりたかったんだよね」
「ひぃっ！　ひぃっ！　んへぇぇぇっ！」
「うっ……」
そして無念にもまた射精してしまう俺。

安男も少し前に気の抜けた声を上げていたから、似たような状況だと思う。
「アキオ君、またなの～？」
「もう放っておいてくれ」
俺は開き直った。

美子先生はその後もイキまくり、アへ声を響かせた。
秋穂は気の向くままにローターをマンコに押し当てているだけのように見えるのに、面白いようにイキまくる。
何をしてもイク。どこを弄ってもイク。そんな感じだった。
「んへぇぇぇっ！　ひぃぃぃっ！」
美子先生は相変わらずすごい顔を晒してアへるばかり。
腕を押さえておく必要がなくなって俺の隣に出てきた安男が、乳汁まみれの乳房を夢中で捏ね回して喜んでいた。

美子先生が唐突に静かになったのはその少し後だ。
顔を見るとアへ顔はそのままで白目を剥いている。
「一丁上がりっと」
秋穂が勝利を宣言した。
「ど、どうなったの？」
「悶絶よ、悶絶。さ、撤収するよ」
「あ、ああ……」
俺は立ち上がってベッドの上で大の字の女体を眺めた。

淫汁で穴周りが真っ白のマンコ。
ワレメの真ん中あたりに勃起したクリトリスが飛び出したまま、まだヒクヒク動いている。
乳汁も止まっていなかった。
身体の周りに散乱した下着や着衣が、この場で何が行われていたのか物語っているような気がした。
「これで美子先生も大人しくなるっしょ」
秋穂が一歩引いて『事後』の惨状を撮影している。

早くパンツを洗いたい。
保健室を後にした俺と安男は、秋穂とハイタッチをかわすと前屈みのまま洗面所に向かうのだった。

あれから美子先生の様子を注意して観察しているが、どうやら誰に襲われたのか分かっていないように見えた。
俺に出会うとさっと目を逸らす。
だから俺が関わっていることは間違いなく認識出来ている。
しかし秋穂と安男に対しては無反応だった。
俺たちは現場で互いに名前を口にしていたと思うけど、美子先生には聞こえていなかったと言うことか。
秋穂に訊いてみると、「パニックだったんでしょ」との話だった。
女の人には珍しくないことらしい。

俺は明らかに経験が足りていない。そこから改善しなくては。

女体に慣れるべく、仲良くなった秋穂に「俺のオチンチンを見たんだからオッパイくらい見せてくれ」とせがんでいるけど、まだ成功していなかった。のらりくらりとはぐらかされてしまう。

「見たければ安男君と組んで襲ってみたら～」などと挑発されて、本気なのか冗談なのか判断がつかない始末だった。

とりあえず撮影した映像をコピーしてもらったので、日々のオカズには事欠かない。

出来れば卒業までに脱童貞したいものだ。

俺は切にそう願うのだった。